

発表要旨

ディケンズとアメリカの都市

吉 田 一 穂

American Notes (1842)は、1842年にチャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)が行った旅の記録であり、大部分は彼がジョン・フォースター(John Forster, 1812-76)へ書き送った手紙に基づいている。ディケンズは、蒸気船ブリタニア(Britannia)号でリヴァプール(Liverpool)を出航した。アメリカに着いたディケンズは、大変な歓迎を受けただけでなく、多くの印象的な人物に出会う機会を得た。*Tales of the Grotesque and Arabesque*をディケンズに謹呈したエドガー・アラン・ポー(Edgar Allan Poe, 1809-49)との出会いは、大きな出会いであった。ディケンズは、きらめく知性と取りつかれたような目を持つポーに感銘を受けた。

一方で、国会にはとても顕著な人物が多くいた。ジョン・クインシー・アダムズ(John Quincy Adams, 1767-1848)、ヘンリー・クレイ(Henry Clay, 1777-1852)、ウィリアム・バラード・プレストン(William Ballard Preston, 1805-62)、ジョン・カルフーン(John Caldwell Calhoun, 1782-1850)などである。アダムズとクレイについてディケンズは、「アダムズはいい人だよ。クレイは、抗し難いほど魅力的な人だよ」と表現している。

ディケンズは、*American Notes*の中で印象的な人物について語っているが、一方で印象的な都市についても語っている。ディケンズが印象的な都市についていかに語っているか、本発表ではこのことについて考えていきたい。

George Orwell の *Nineteen Eighty-Four* における Mr. Charrington の良心

高 橋 一 馬

George Orwell (1903-50)の最後の長編小説である *Nineteen Eighty-Four* (1949)は、出版から70年を経過した現在においても、全体主義のもたらす恐怖を描いた風刺作品として、評価が高い。しかし、政治的な文脈で語られることが多いため、物語の細部や登場人物に関する詳細な考察は、作品に対する注目度と比較して、決して十分とは言えない。

そこで、本発表では作品の主要な登場人物である Mr. Charrington の果たす役割に、改めて着目する。彼は、「思考警察」の一員として、主人公 Winston Smith を見事に罠に陥れる。その Winston が反逆者として逮捕される場面で、Mr. Charrington は一つ、奇妙な命令を部下に下す。それは、変装した Mr. Charrington が主人を務める骨董屋で Winston が購入し、過去を表象するものとして大切に扱ってきた「ガラスの文鎮」が党员によって砕かれた際、その破片を拾わせるといふものである。なぜ Orwell は、彼にそのような行動を取らせたのか。この疑問を軸に、小説としての *Nineteen Eighty-Four* に、新たな角度から光を当てることが、本発表の目的である。

「ニューヨークのユダヤ人—アルフレッド・ケイジンの描くニューヨーク—」

山 内 圭

「ニューヨークのユダヤ人」アルフレッド・ケイジン(Alfred Kazin, 1915-1998)は、大著

On Native Grounds(1942) (『現代アメリカ文学史 現代アメリカ散文文学の一解釈』) でよく知られる。この書は、ニューヨーク・マンハッタン 42 丁目の New York Public Library の 315 号室で毎日、読書及び研究をしていたことの賜物である。また、彼には *A Walker in the City* (1951) や *New York Jew* (1978) (『ニューヨークのユダヤ人たち』) の著作もある。本発表では、ニューヨークがアルフレッド・ケイジンにどのような影響を与え、そして彼がニューヨークをどのように描いたかを検討する。